長野県教育委員会

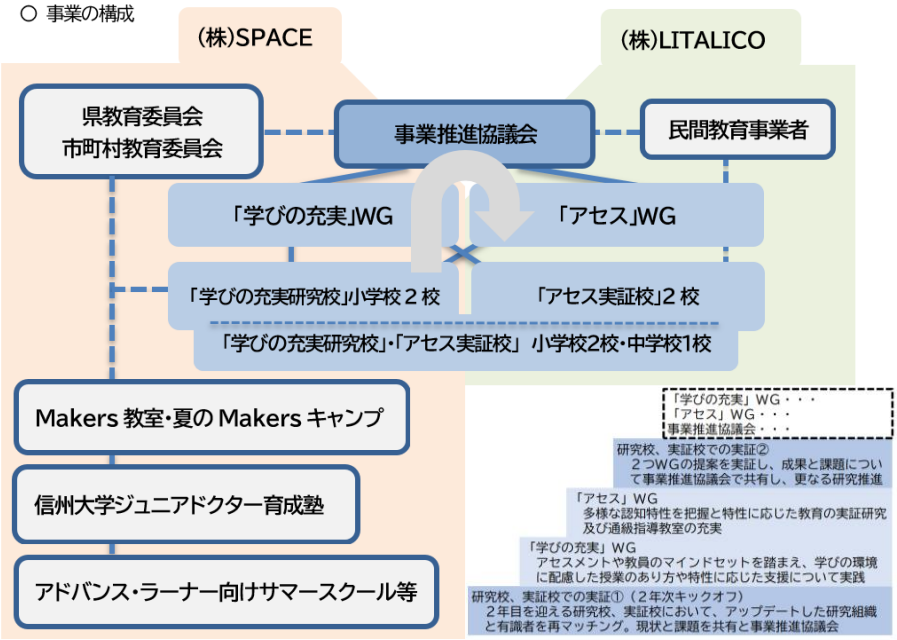
研究成果報告書

１．研究概要

長野県教育委員会では、「信州型ユニバーサルデザイン」として全ての児童生徒が学びやすいように教師の意識向上に取り組んできたが、令和５年度より認知や発達に特性を抱える児童生徒にも対応できるよう研究を進めている。

具体的には、特性を包み込む授業の在り方や、個々の特性を把握するアセスメント方法、特性に応じた教育方法についての研究を「学びの充実研究校」、「アセス実証校」７校で進め、事業推進協議会や２つのワーキンググループ（WG）を設置（「学びの充実WG」と「アセスメント・教材提案ツール活用実証校WG（以下、アセスWG）」）し、有識者からアドバイスも受けている。

また、大学や民間団体等との連携により、ジュニアドクター育成塾やアドバンス・ラーナー向けサマースクール等の学校外の新たな学びの場の提供に引き続き取り組む。



２．研究内容

（１）研究課題

（研究領域１）学校内での取組に関すること

☐　a 単元内自由進度学習や異年齢集団による学習、理解の状況に応じた課題の設定など、特異な才能のある児童生徒をはじめ子供の関心等に合った授業や学習活動の在り方

☑　b 特異な才能のある児童生徒を含む全ての子供たちが互いに尊重される授業や学級経営の在り方など、多様性を包摂する学校教育環境の在り方

☐　c 児童生徒が普段過ごす教室や学校内の他の教室等、指導・支援に取り組むための多

様な学びの場の設定や連携の在り方や、過ごしやすい居場所としての環境整備・人的サポート等の在り方

☑ d 特性等を把握するためのサポートを受けながら行う特異な才能のある児童生徒への指導・支援の在り方

☐ e 才能と障害を併せ有する児童生徒への対応の在り方

（研究領域２）学校と学校外との連携に関すること

☑ f 学習面・生活面にわたる学校と学校外との機関との連携による指導・支援の方法

☐ g 特異な才能のある児童生徒に支援を提供するための学校外の機関の在り方や、その機関と連携して学習を行う際の学習状況の把握や学習評価の在り方

☐ h 才能と障害を併せ有する児童生徒への対応

（研究領域３）児童生徒を取り巻く環境の整備に関すること

☐ i 教職員への研修の在り方や、保護者、地域社会の理解の醸成の在り方

☐ j 各主体が保有する情報集約や、主体間の情報連携・共有の在り方

☐ k 児童生徒の機微な情報の共有の在り方、進学時の情報の引き継ぎなど学校段階間の連携の在り方

（２）研究における取組

＜内容＞

（研究領域１）令和５年度の取組

令和５年度の取組を**図１**のように表した。全ての児童生徒を、以下の３つの層でイメージしている。

第一層：通常の学級での質の高い指導を実施
第二層：通級指導教室での少人数での補足的な支援
第三層：特別支援学級等での個別的な支援

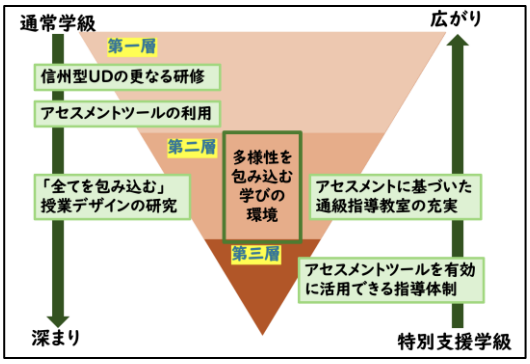


図１　令和５年度の取組のイメージ

「学びの充実 WG」は、第一層から第三層に向かうイメージで、主に通常学級における授業改善から、全ての児童生徒を包み込む授業デザインについて研究を進めた。（**研究領域 1b**）

一方、「アセスWG」では、第三層から第一層に向かうイメージで、主にアセスメント等の活用、通級指導教室の利用などを踏まえながら、担任の経験や感覚だけでは気付きにくい一人一人の特性の早期発見や、個別学習で身に付けた力を在籍学級で発揮すること等を目指す姿として通級指導教室と通常の学級担任との連携に視点を当て研究を進めた。（**研究領域1d**）

①　研究領域1b（特異な才能のある児童生徒を含む全ての子供たちが互いに尊重される授業や学級経営の在り方など、多様性を包摂する学校教育環境の在り方）

「学びの充実WG」（小学校４校、中学校１校の研究校）では、本事業を進めるにあたりご協力いただいている有識者から「教師のマインドチェンジのための実態把握の重要性」を指摘され、オブザーバーの一人である福本理恵氏と（株）SPACEの協力のもと、現状の授業に関する教師の意識調査を研究校で行った。

意識調査の結果から、横軸を「自ら学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整する姿」、縦軸を「知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を身に付け、学びに満足する姿」とし、４象限マトリクスの中に、「教師から見る認知発達特性と授業の困り感の関係」（**図２**）として表した。

一斉指導の授業デザインの範囲に当てはまるのは、児童生徒の７割程度と言われており、当てはまりにくい残りの３割程度は以下のように位置付くのではないかと考えた。

- **図２**の第３象限に位置する児童生徒は特別な支援を含み対応が必要である
- **図２**の第４象限に位置する児童生徒は授業内容が自分の能力より簡単で、課題への意識が高まらず満足できない傾向がある

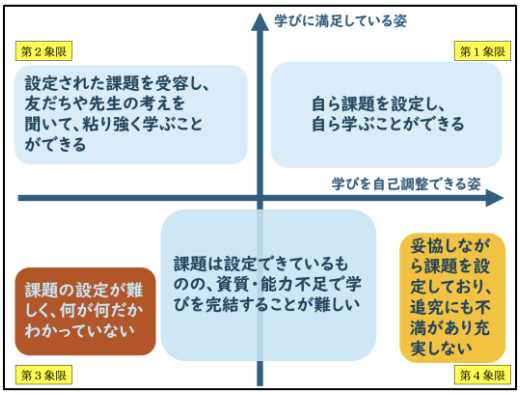


図２　４象限マトリクスで表した「教師から見る認知発達特性と授業の困り感の関係」

以上を踏まえて、全ての児童生徒を包み込む授業の在り方について考えていった。

学習指導要領の主旨の浸透とともに、令和の日本型学校教育の理解も進む中、教師が教える授業から、多様性のある児童生徒とともに作り上げる授業へ意識が高まりつつある。しかしながら、その重要性は分かっているものの、いざ授業になると一斉一律の授業になってしまう現状もある。

研究校においては、教師が授業に臨む際のチェックリストや心得を独自に作成し実践を進めたり、体育の授業において、技も練習メニューも全て児童が計画する授業が実践され、そうした授業を共有し、学校全体で授業改善が進んでいる。

こういった実践が進む中で、教室で困り感を抱えている児童生徒には、特別支援学級や通級指導教室等での支援が必要とされている他に、授業内容を簡単に感じている児童生徒には、授業への興味・関心が高まらないことが多いということがわかってきた。特定分野に特異な才能のある児童生徒は、後者の中に存在する可能性が高いことも見えてきた。

②　研究領域1d（特性等を把握するためのサポートを受けながら行う特異な才能のある児童生徒への指導・支援の在り方）

アセス WG では、担任の経験や感覚だけでは気付きにくい一人一人の特性の早期発見や、個別学習で身に付けた力を在籍学級で発揮すること等を目指す姿として、通級指導教室と通常の学級担任との連携に視点を当てた実践研究を進めてきた。

その際、（株）LITALICO が開発した教育ソフト等、既存のアセスメントツールを効果的に活用し、通常の学級担任でも簡便に活用できるアセスメントとそれを活かした支援について実践を通して検討を行った。

併せて、通級指導教室を利用する児童生徒が、通級指導教室で身に付けた力を、通常の学級で発揮するための教師間の連携の在り方等について実践を通して検討を行った。

学校には小さな SOS を出したり、それもできずに静かに困っていたりする児童生徒がいる。しかしながら、その支援は、担任教諭や担当教諭の力量に頼る傾向がある。そのため、既存のスクリーニングに応じたアセスメントツールの活用による支援の方向を研究した。

具体的には、児童生徒たちの SOS を教師とどのように共有していくかのフローを示し、必要に応じてサポートチームが対応する仕組みを構築した。

結果、教師の感覚だけでなく、アセスメントの結果を用いることで、児童生徒たちの情報の共有をスムーズに行うことができ、教師全体での取組にも発展しやすい。そのため民間フリースクールとの連携も可能になってきている。

今後の課題は、教師が行うアセスメントの負担軽減と児童生徒の自己理解にアセスメントを活用していくことである。

アセスメントを広範囲かつ精緻に実施することは理想的であるが、教師への負担が大きい。そのため、簡易なスクリーニングとアセスメントを組合せ、学校全体で取り組める方法を考えていきたい。

また、中学校では、（株）SPACE と連携し、全ての生徒が自己理解のためにアセスメントを活用する。自分自身の特性や学び方の傾向を見える化し、生徒自身が自分の特性や学び方を意識しながら、生涯にわたって学び続けられる素地を醸成していく取組を進めていく。

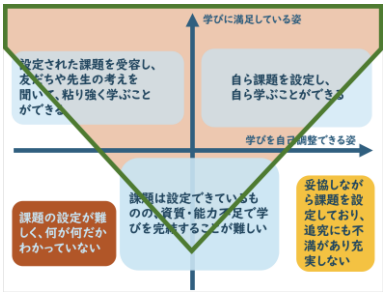
（研究領域１）令和６年度の取組

令和５年度の取組から、以下の２点で研究を進めていく。

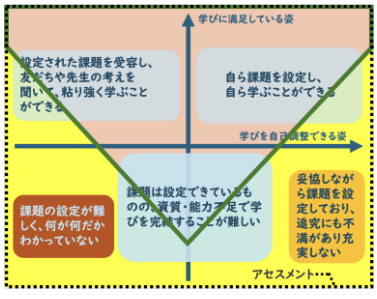
・授業に関する教師の意識を把握しながらマインドチェンジに向けて継続的な研修の実施し、授業改善の研究を進めていく（**研究領域1b**）

・簡易なスクリーニングとアセスメントを組合せ、学校全体で取り組める方法を考えていく。特に、中学校では、生徒が自己理解のためにアセスメントを活用し、生徒自身が自分の特性や学び方を意識しながら学習する研究を進めていく（**研究領域1d**）

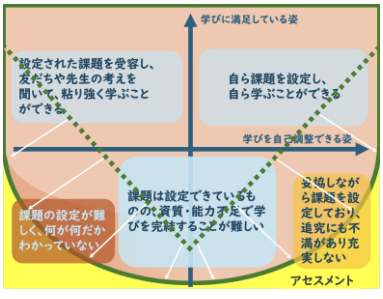
令和５年度の取組から、全ての児童生徒を包み込む授業デザインの実現のイメージ（**図４**）を描き、**研究領域1b**、**研究領域1d**から得られた成果を合わせて令和６年度の研究（**図５**）を進めていく。アセスメントを活用した授業改善や、通級指導教室等を通した教師間の連携等を通して、第１層の部分を広げていくことで、第２層、第３層では、個別的な支援をより必要としている児童生徒に支援をしていけるようにしていく。また、全ての児童生徒を包み込む授業デザインを進めていく中で、特定分野に特異な才能のある児童生徒が存在する可能性があることを教師がイメージできるようにし、理解度を高めていく。



一斉指導の授業デザインの範囲に当てはまりにくい３割を含めた全ての児童生徒を包み込む授業づくりを進めていく。

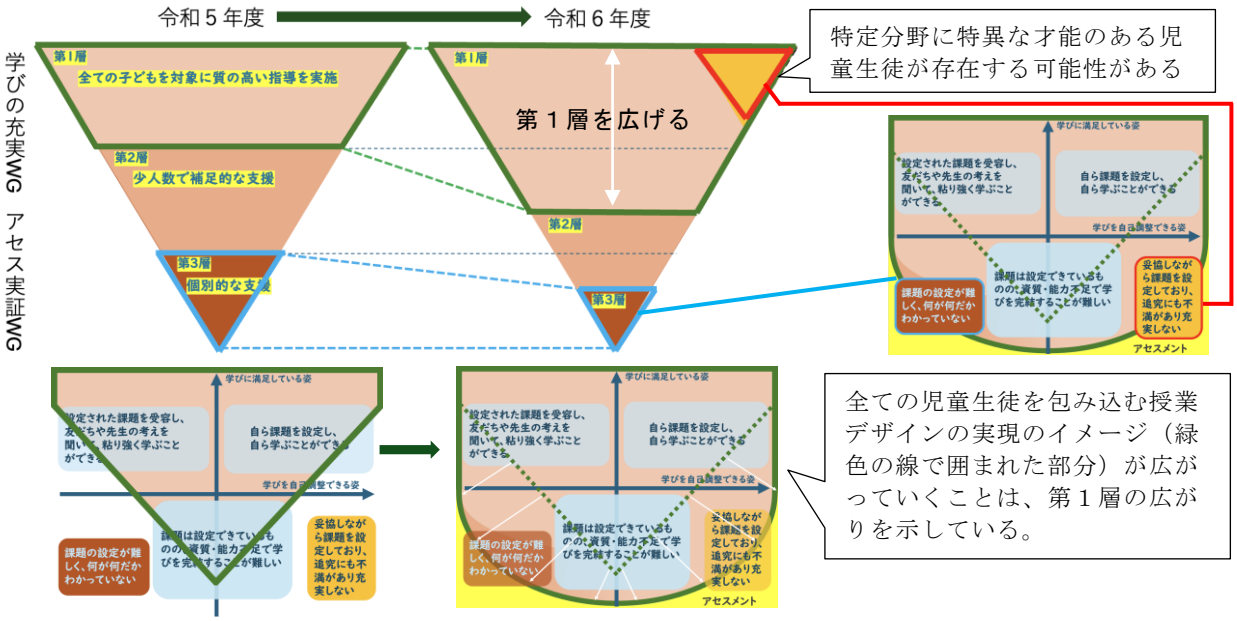


簡易なスクリーニングなども活用しながらアセスメントを実施。全ての児童生徒を包み込む授業改善を進める。



アセスメント結果を活用して授業改善を進めていくことで、全ての児童生徒を包み込む授業デザインを実現していく。

図４　全ての児童生徒を包み込む授業デザインの実現のイメージ



全ての児童生徒を包み込む授業デザインの実現のイメージ（緑色の線で囲まれた部分）が広がっていくことは、第１層の広がりを示している。

図５　令和６年度の研究のイメージ

（研究領域２）令和５年度の取組

研究領域2f（学習面・生活面にわたる学校と学校外との機関との連携による指導･支援の方法）

学校の枠を超えたサードプレイスとしての「学びの場」について、既存のものを整理しつつ「特定分野に特異な才能がありそうな児童生徒」のニーズにも応えられるよう新設した。

・信州Makersキャンプ、教室【既存】

授業で学習したプログラミングやものづくりをさらに詳しく、専門的に学びたいと思っている長野県内の小学校３年生から中学校２年生までを対象に計４日間開催。民間のゲーム制作会社「アソビズム」からプログラム、講師の提供を受け、信州大学教育学部村松浩幸研究室、小倉光明研究室と連携し、長野県教育委員会が主催して実施。

・信州大学ジュニアドクター育成塾への支援【既存】

信州Makersキャンプ、教室で学んだ児童生徒の中で、大学の先生から専門的な知識を学び、能力を伸長する体系的育成プランを紹介し、後援、協力という立場で携わっている。対面・オンラインで月２回のペースで半年間開催。

・アドバンス・ラーナー※向けスクールの開催【令和５年度　新設】

※）知識が高く学びの習熟が早い子や好奇心が極めて強い子など。「ギフテッド」とも呼ばれる

主催：一般社団法人 Education Beyond　共催：長野県及び長野県教育委員会

大学生等のチューターが主にオンラインミーティングにて伴走支援し、子供たちは自身が設定した研究テーマを深掘り。プログラムの初日及び最終日には対面イベントを開催し、参加者同士の交流や研究発表会を実施。

長野県内の公立小学校及び中学校には市町村教育委員会を通じて周知、私立小学校及び中学校（義務教育学校及び中等教育学校を含む。）並びにフリースクールには知事部局を通じて周知を

行った（参加対象は、サマー：小学校４年生～６年生、ウインター：小学校３年生～中学校３年生）。周知の際は、サマースクール等の趣旨等を記載した教師用手持ち資料も用意し展開した。また、ウインタースクール開催の際には、教育関係者向けの現地見学会を併せて開催し、アドバンス・ラーナーに係る認識の浸透に取り組んだ。

実施後の参加者アンケートから、実験、試行錯誤、調査、仲間からの刺激等を通して、普段の学校環境では実現されにくい知的好奇心を深掘りできた様子や、同じような仲間の存在や広がりを体感し、自然体、等身大の自分での居場所が確認できた様子が伺えた。

また、県教育委員会が積極的に関わることで、サードプレイスの重要性や他機関との更なる連携について発信できた。

プログラムに対するニーズがあることがうかがえたものの、アドバンス・ラーナーに係る認識の浸透が十分でないこと、関心はあるものの参加申込に至らないケースが相当数あったため、取組の広がりに向けて継続的に実施するとともに、情報の発信方法について工夫していく。

（研究領域２）令和６年度の取組

令和５年度に整備・新設した学校の枠を超えたサードプレイスとしての「学びの場」を、より広く周知できるよう、情報の発信方法等を工夫していく。

また、**研究領域１**で、特定分野に特異な才能のある児童生徒が表出してくると考えた層に対して、そのニーズにも答えられるように学校の枠を越えた「学びの場」について、**図６**のようにまとめた。

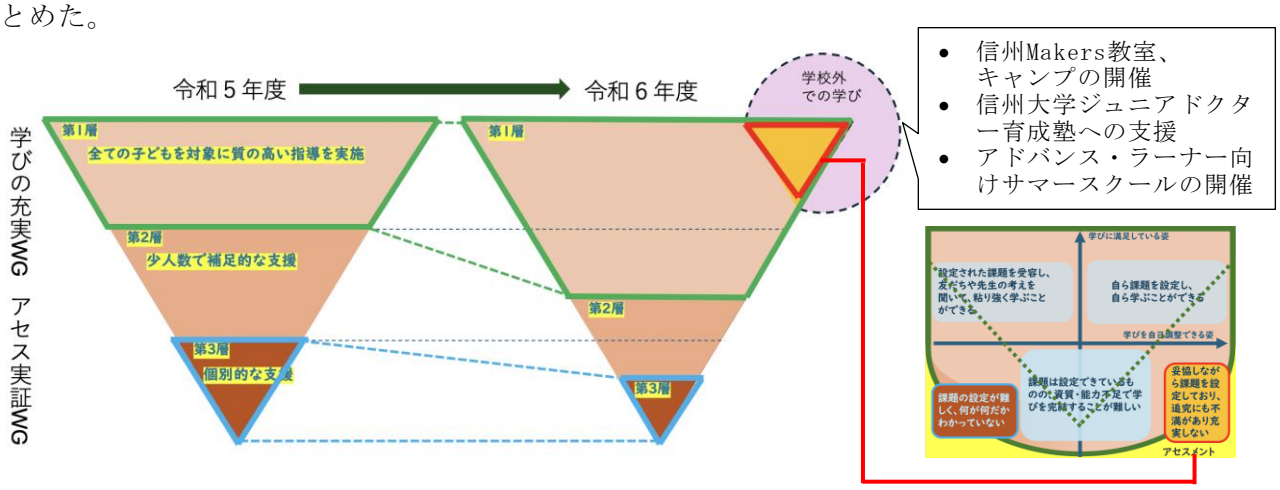


図６　令和６年度の研究のイメージ（研究領域１と研究領域２の関連付け）

各校の実践や有識者の方たちとの議論を基に、全ての児童生徒を包み込む授業デザインに向けて、令和５年度の取組内容をスタートアップリーフレット（**図７**）にまとめた。

全ての児童生徒を包み込む授業デザインを推進する中で、特定分野に特異な才能を持つ児童生徒への理解を教師に深めてもらえるようリーフレットを各校に配付するとともに、長野県教育委員会のホームページに掲載し周知した。

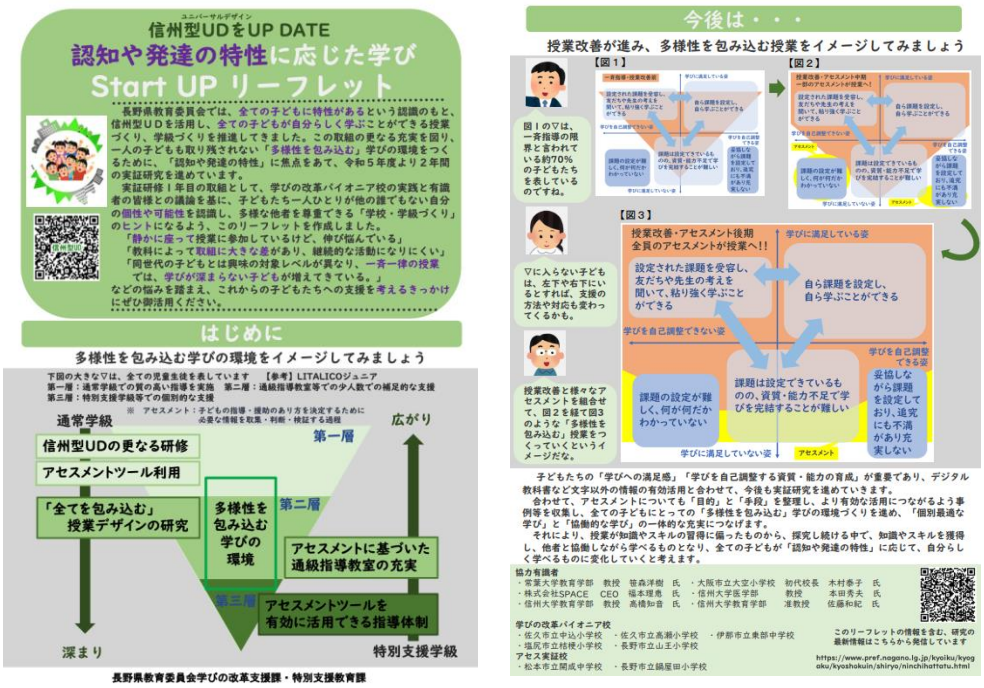


図７　スタートアップリーフレットの一部

リーフレット配布に加えて、ホームページやSNS等を整理し、それらを活用し、認知度の向上に向けた情報発信の工夫を行った。

＜経過＞

月	取組内容
４月	・４月 16 日（火）　「学びの充実」WG①・「アセス」WG① 有識者２名＋研究校・実証校＋民間教育業者 令和５年度の成果と課題の整理、方向性の確認、年間計画の作成、有識者、指導主事マッチング、アセスメント・教材提案ツールについての説明
５月	・５月９日（木）、16 日（木）オンラインミーティング ・５月 23 日（木）　第４回事業推進協議会 有識者＋研究校・アセス実証校＋民間教育業者 令和５年度の成果と課題から本年度の研究の方向性を確認、有識者から助言
６月	・６月１日（土）、２日（日）Makers 教室（STEAM 系イベント）の開催 会場：信州大学教育学部、長野県総合教育センター ・６月３日（月）～　指導主事による学校訪問支援の開始 ・６月 10 日（月）オンラインミーティング ・６月 18 日（火）アドバイザー派遣 ・６月 21 日（金）指導主事を交えた研修の実施
７月	・７月 11 日（木）　「学びの充実」WG②・「アセス」WG② 有識者２名＋研究校・実証校＋民間教育業者 アセスメントを活用した授業改善に関する情報交換 ・７月 17 日（水）、23 日（火）指導主事を交えた研修の実施 ・７月 14 日（日）～８月 25 日（日） アドバンス・ラーナー向けのサマースクールの実施
８月	・８月８日（木）文部科学省との本事業に係る打ち合わせ ・８月 10 日（土）、11 日（日）Makers キャンプ（STEAM 系イベント）の開催 ・８月 22 日（木）アドバイザー派遣
９月	・９月５日（木）　「学びの充実」WG③・「アセス」WG③

	有識者２名＋研究校・実証校＋民間教育業者 アセスメントを活用した授業実践について情報交換、公開授業の計画
10 月	・10 月はじめ　研究校への事業後アンケートの実施 ・10 月 23 日（水）指導主事を交えた研修の実施
11 月	・11 月１日（金）、８日（金）、19 日（火）、26 日（火）公開授業の実施 ・11 月 12 日（火）　「学びの充実」WG④・「アセス」WG④ 有識者２名＋研究校・実証校＋民間教育業者 アセスメントを活用した授業実践の成果・課題の整理 ・11 月 20 日（水）　第５回事業推進協議会 有識者＋研究校・アセス実証校＋民間教育業者
12 月	・12 月 19 日（木）　「学びの充実」WG③・「アセス」WG③ 有識者２名＋研究校・実証校＋民間教育業者
１月	・１月 24 日（金）令和６年度　学びの改革フォーラムながの 研究報告、実践発表 ・１月 31 日（金）　第６回事業推進協議会 有識者＋研究校・アセス実証校＋民間教育業者
２月	令和６年度成果報告書の作成、完成、提出
３月	全県指導主事、専門主事会議において研究報告

３．実証研究の成果や課題

＜成果＞

（１）学校内での取組に関すること（研究領域１）について

①　教師のマインドチェンジ

教師の意識を調査するためのアンケートを、令和５年６月～７月（プレ調査）と令和６年９月～10月（ポスト調査）に実施した。

「授業の中で生徒が学習方法や学習内容を自由に選択する場面が設けられている」という質問に対し、「あてはまる」または「どちらかというとあてはまる」と回答した割合は、この２年間で19ポイント増加（35.0%→54.0%）した（**図８**）。

また、「授業時間中、教員が説明する時間が７割を超えている」という質問に対し、「あてはまらない」または「あまりあてはまらない」と回答した割合は、25ポイント増加（45.0%→70.0%）した（**図９**）。これから、授業が一斉指導中心から、生徒が主体的に学ぶ授業デザインへと変化しつつある傾向が伺える。

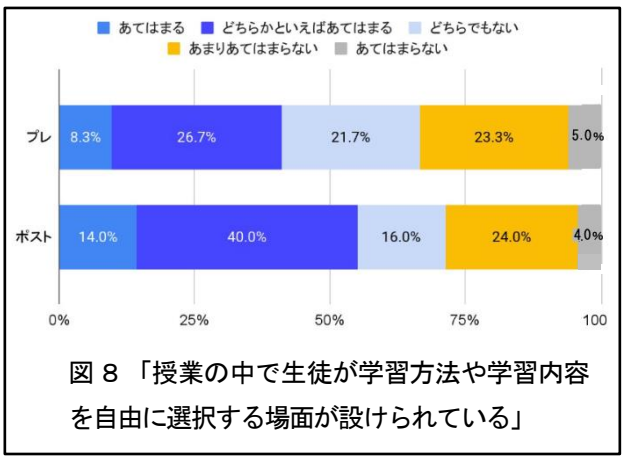


図８「授業の中で生徒が学習方法や学習内容を自由に選択する場面が設けられている」

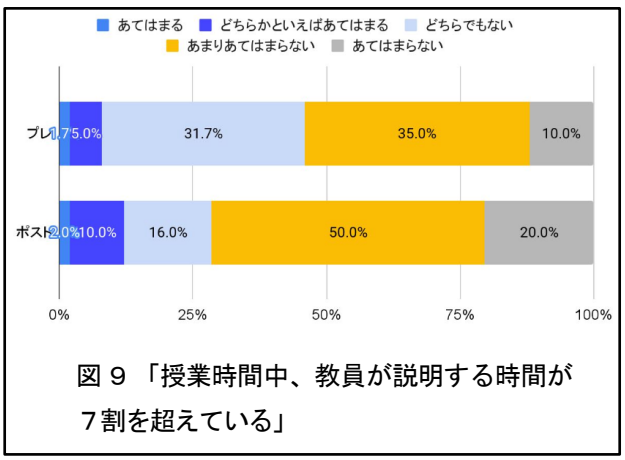


図９「授業時間中、教員が説明する時間が７割を超えている」

研究校の教師からは「教師が教える授業から、多様性のある児童生徒とともに作り上げる授業へ転換する意識が高まってきているように思う」という声が聞かれるようになり、この意識の変化に係る点を、研究校の教師らと以下の２点にまとめました。

・全体で共通のイメージを共有する

「全ての児童生徒を包み込む授業デザインの実現のイメージ」から授業改善のポイント（**図10**）を具体的に各校に示した上で、各校において共通の方向性を持てるようにした。これにより、共通のイメージをもった上で教師間の対話が促進され、学校全体で授業改善に取り組む土台を整備した。

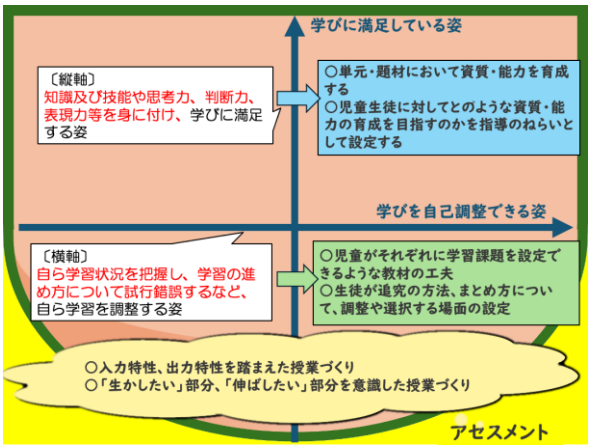


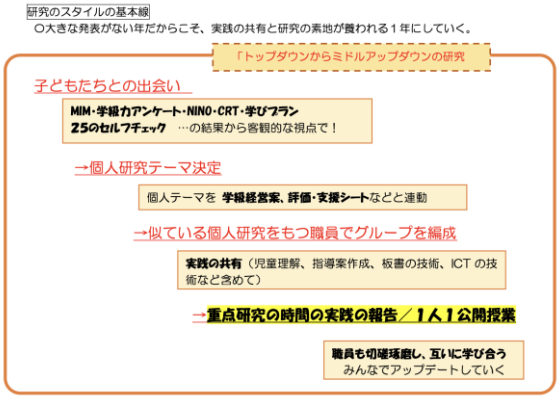
図 10　「全ての児童生徒を包み込む授業デザインの実現のイメージ」を示した授業改善のポイント

・共通のイメージを基に、子供の姿から考える

各学校では、授業改善のポイントをもとに、子供の視点で授業改善を考える。教師全体で共通のイメージを持ち、子供の姿から授業改善や研修に継続的に取り組んだ。

〈取組例：塩尻市立桔梗小学校〉

塩尻市立桔梗小学校では、「全ての児童生徒を包み込む授業デザインの実現のイメージ」を共有した上で、学校独自に作成したセルフチェックシートやアセスメントツール等も活用しながら、教師全員で子供の姿を客観的に捉え、学校全体で共通のイメージを教師全体で共有することから、今年度をスタートした。共通のイメージのもと、教師一人一人が個人研究テーマを設定し、研究テーマが似ている教師同士でグループを編成し、年間を通して研究を進めていった。



昨年度の研究により、授業への興味・関心が高まらない子供の中に、特定分野に特異な才能のある子供が含まれている可能性が高いことが見えてきており、こうした子供たちは、従来の授業の枠組みではその才能を十分に発揮できない場合があり、教師がその存在に気付きにくいことも考えられる。

「全ての児童生徒を包み込む授業デザインの実現のイメージ」を具体化するために、教師のマインドチェンジを促し、授業改善を進めていくことで、教師の子供の捉え方が変わり、特定分野に特異な才能のある子供の存在にも気付きやすくなるのではないかと考えた。

②　アセスメントの活用した授業実践

アセスメントを広範囲に精緻に行うことは理想的ではあるが、学校現場では、負担が大きい。そこで、教師が行うアセスメントの負担軽減と子供たちの自己理解の促進を狙って、中学校では、認知や発達の特性、興味関心を把握するアセスメントを生徒自身が実施し、自分

のもっている才能や自分の学び方の癖を見える化し、捉えられるようにした。

〈取組例：伊那市立東部中学校の取組例〉

1　アセスメントについての研修を実施。生徒が使用するアセスメントツールを教師自身がまず体験し、教師自身の認知や発達の特性、興味・関心について把握し意見交換するところからスタートした。自分自身の特性を分析したり、教師間で意見交換したりすることを通して、「誰もが異なること」を体験的に学んだ。

▼

2　生徒自身がアセスメントツールで、自分自身の認知や発達の特性、興味・関心について把握し生徒同士で意見交換を行った。教師は自身のアセスメントの体験をいかして、生徒たちに「誰もが異なること」やアセスメント結果をプラスのイメージとしての自覚できるように促した。

▼

3　生徒はアセスメント結果から、自分の認知や発達の特性、興味・関心に基づいて、自分の「学び方トリセツ」を作成した。

▼

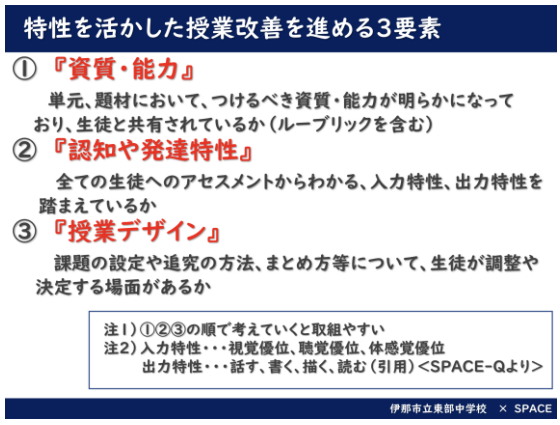
4　教師は研修の中で、生徒が作成した「学び方トリセツ」を踏まえて授業改善を進めた。
- 子供たちが学びやすい授業
- 子供たちが主役になる授業
- 誰一人取り残されない授業　　を目指すことを教師全員で共有

▼

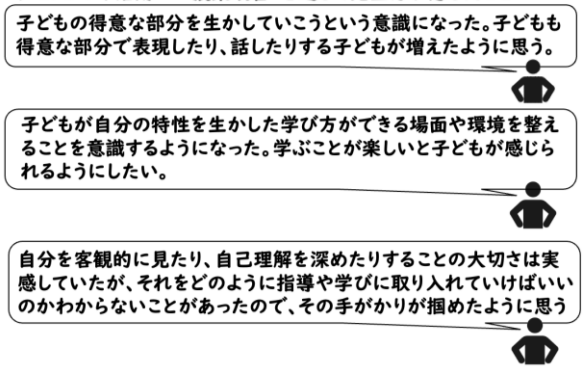
5　さらに具体的に、特性を活かした授業改善を進める三要素を示し授業づくりに取り組んだ。

〈アセスメント結果を授業で活用した例〉

- 入力特性では、「聞くこと」より「視覚」からの情報を取り入れる生徒が多かったため、導入を短くするために、授業の流れを端的に伝えるようにした。ICTや掲示物を取り入れる工夫をし、説明するよりも生徒自身が学ぶ方法を選択できるようにした。
- 出力特性では、書くことより話すことに力がある生徒が多かったため、授業の振り返りでは、情報交換の場を設定し、自分の本時の思いを語り、情報交換で印象に残ったことをカードに記入するようにすることで、具体的な記述ができるようにした。



〈教師の振り返りから〉



生徒自身がアセスメントを活用し、その結果を授業改善につなげる取組から、ポイントとなる点を以下のようにまとめた。

- 昨年度の課題であったアセスメント実施時の教師の負担感については、生徒自身がアセスメントを実施することで、教師が必要なデータを入力する負担がなくなり軽減された。

- 生徒自身がアセスメントを通して自分の特性を理解し、「誰もが異なること」を実感することで、興味関心や向いている学習方法が人によって異なることを理解した。このことは、生徒同士の相互理解を深めるとともに、すべての子供を包み込む授業デザインの実現につながる重要な要素となった。
- 教師自身も研修の中で生徒が使用したアセスメントを体験し、教師が自身の特性を理解することで、生徒の多様性をより深く受け止めたり、授業改善の必要性に気付くきっかけにもなったりすることが伺える。

③　２年間の成果をまとめたデジタルリーフレット

２年間の取組についてデジタルリーフレット（図11）にまとめ、本実践を横展開する際に活用できるようにした。

長野県教育委員会のホームページに掲載する他、ちらし※参考資料を作成し、県内の小中学校、特別支援学校へ配付し周知する。

〈デジタルリーフレットURL〉

https://ookinahayasi.my.canva.site/dagd8uc7w7o

図 11　デジタルリーフレット

（２）学校と学校外との連携に関すること（研究領域２）について

学校外の新たな学びの場への参加状況

学校外の新たな学びの場	R5年度　参加人数	R6年度　参加人数	人数の増減
信州Makers教室	32名（２会場合計）	72名（２会場合計）	＋40
信州Makersキャンプ	47名	48名	＋１
アドバンス・ラーナー向けサマースクール	８名 （参考：ウインタースクール15名）	27名	＋19

①、②のような取組を行った。参加する児童生徒の人数は、昨年度と比較して増加した。

①　学校外の新たな学びの場の周知方法の工夫

ホームページやSNSを整理し、情報発信の手段を増やし、より広く周知できるようにした。

〈取組例：BEYOND SCHOOL（アドバンス・ラーナー向けサマースクール）〉

・期間は、７月14日～８月25日の約６週間。
・小学２年生～中学１年生の子供たち、計27名（県内21名、県外６名）が参加。
・プログラム内容は、令和５年度のものをベースに、興味のある分野を踏まえた参加者によるチューターの選択、参加者同士の交流・刺激等を目的としたグループ活動の導入、などといった工夫を加えた上で実施。
・プログラム初日及び最終日には、保護者会を開催し、同様の特性等を有する子供を持つ保護者同士の情報交換を実施。また、本プログラムやアドバンス・ラーナーに係る認識の浸透等を目的とした教育関係者向けの現地見学会を最終日に開催し、他県の県及び市町村教育委員会が参加。
・参加者アンケートの結果によると、「今回のプログラムに参加して良かったと思いますか」という満足度を問う質問に対して、回答者※全員から、「とてもそう思う」（20名）又は「そう思う」（３名）と、満足と評する回答が得られた。
※回答者23名（総参加者27名、回答率85.2％）
・回答の理由として、「研究してみたかったテーマを深く探求できた」「学校では満たされない知的好奇心が満たされた」といった学習面における満足感に加え、「同じような仲間と出会えた」「相談できるチューターと出会えた」といった、他者とのつながり・協働といった面における満足感も得ていることがうかがえた。

②

特定分野に特異な才能のある児童生徒への教師の理解にむけて

特定分野に特異な才能のある児童生徒への理解を多くの学校や教師に広めてもらえるように、公開授業を実施。

〈公開授業〉

- 伊那市立東部中学校　６月21日（金）、11月１日（金）
- 長野市立山王小学校　11月８日（金）
- 塩尻市立桔梗小学校　11月19日（火）、11月26日（火）

＜課題＞

（１）学校内での取組に関すること（研究領域１）について

全ての児童生徒を包み込む授業デザインにむけての２年間の取組を、広く周知し、横展開していく必要がある。作成したデジタルリーフレットを活用しながら、本事業での取組を広めていくための方策を具体的に検討していく必要がある。

〈令和７年度の予定〉

- 既存のICTに関する研修「教育クラウド活用しよう出前講座」（**図12**）で、本事業での成果を研修の中で活用する。研修を通して、全ての児童生徒を包み込む授業デザインの構築や、特定分野に特異な才能のある児童生徒の存在を広く広めていく。
  また、これ以外にも活用できる研修等を検討していく。

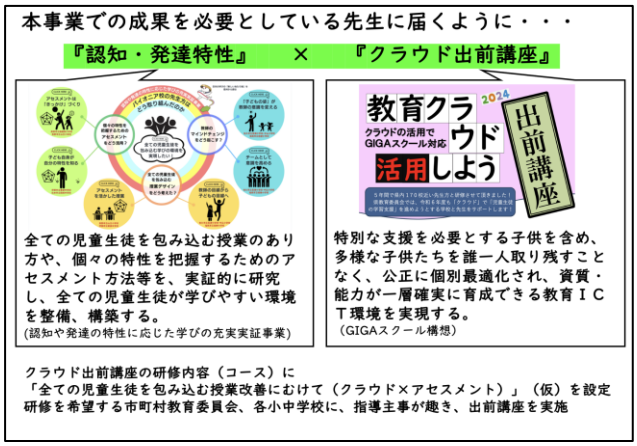
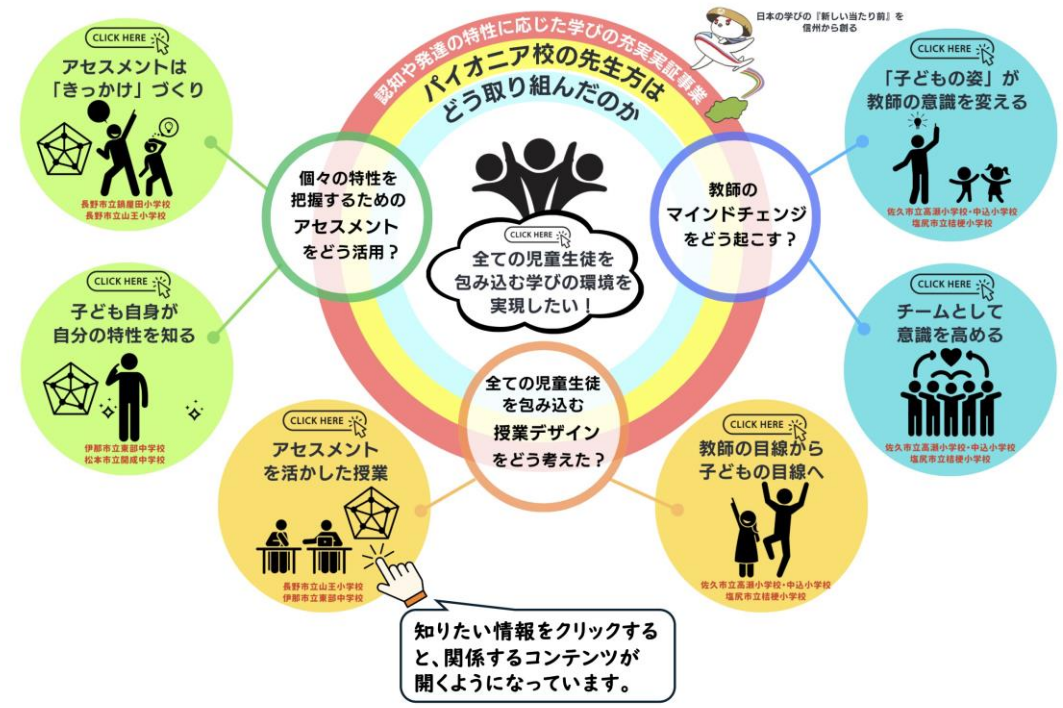


図 12　クラウド出前講座について

（２）学校と学校外との連携に関すること（研究領域２）について

この２年間の研究では、学校内における授業改善と学校外での学びの場の整備について進めてきたが、特異な才能のある児童生徒が、その特性に応じた学びを継続的かつ持続可能な形で行っていくには、学校と学校外での学びの場が連携する体制が大事になってくる。そのため、連携の在り方について研究を進めていきたい。

４．参考資料

※　デジタルリーフレット　広報用ちらし

〈デジタルリーフレットの使い方〉 表面の二次元コードを読み込むとデジタルリーフレットが表示されます。